

## ハイエンドのCMOSイメージ センサ市場で主導権狙う

CMOSIS社社長 (CEO) ギー・メイナンツ 氏



携帯電話、デジカメのたぐいから一眼レフカメラ、ビデオカメラに至るまで半導体イメージセンサの応用分野は燎原の火のごとく広がっている。ベルギーはアントワープに本拠地をおく半導体ベンチャー企業のCMOSIS (シーモシス) 社は、名が体を表すと言うべきか、CMOSイメージセンサに特化してビジネス展開を図る新進の注目企業だ。

CMOSISは旧フィルファクトリー社の経営陣を中核にした5人のメンバーによって設立された。彼らはいずれもイメージセンサ技術の専門家で、ベルギー政府が半導体強化プログラムの一環として設立したIMECやフィルファクトリーで半導体開発の経験を積んだ。

このほど来日した同社社長でCEOのG.メイナンツ氏は、「この市場ではCCDが一大勢力を形成しているが、今やCMOSがその強力なライバルとして確固たる地位を築きつつある」と口を開き、「われわれのCMOSイメージセンサに関する知的財産、これまでに蓄積した客先とのコンタクト、そしてベンチャーキャピタルとして資金供給源になっているキャピタル-E社の後ろ盾を考えると、当社が短期間でこの市場での重要なプレーヤ

ーになることは間違いない」と自信いっぱい。

ちなみにキャピタル-Eは地元ベルギーを基盤にした代表的なベンチャーキャピタルで、欧州における半導体関連のスタートアップ企業への初期投資を重点的に行っている。同社から投資を受けたベンチャー企業がIMECの技術資源を活用できるメリットも大きい。

CMOSISのトップは当然のことながらCMOS主流論に与しない。「低消費電力、低コストでCCDを大きく引き離し、画質の向上も著しい。残る問題はノイズだが、ここに来て抑制技術が急速に進んだ」。

CMOSISの対応で特徴的なのは、同じイメージセンサでも高度な性能を求められる産業機器やプロフェッショナル機器市場に絞り込んでいることだ。実際、その応用市場として機械用画像処理、生体認証、動体分析、医療画像などがあり、さらに科学機器、宇宙関連に及んでいる。

この種の応用展開は、ハイエンド志向とでも言うべきもので、それだけに一品料理的に製作されるチップも少なくない。なかでも同社の自慢の種はX線装置などに使う13cm角の大形チップ (いやウェハと呼ぶべきか)

で、画素数も6,800万に上る。当然、消費電力も大きくなるが、「これにはCMOSの利点がフルに活かされた」。もっともこれだけの大画面センサを高歩留りでつくるのは並大抵のわざではなく、これにも同社独自の技術資産が寄与した。

CMOSISは創業間もないということもあるが、ファブレスメーカーとして徹底した少数精鋭主義を採っている。現に本年1月現在の従業員は4人で、うち3人が設計、1人が販売およびマーケティングを担当している。近く設計部門の増員を図る予定だが、「半導体ビジネスで生き残るには、単に頭数の問題ではなく能力のいかんにかかっている」と気に留める様子もない。

スタート間もない同社にとってはこれからが正念場だが、3年目で400万ユーロ、5年目で900万ユーロの売り上げを目標にしている。グローバルライアンスが業務に当たる日本市場にはその牽引力となることを期待しているが、「幸いハイエンド分野で有力なユーザーが目白押し」とメイナンツ社長は目を細めた。

(志村幸雄)